

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

グローバル化時代における文化交流についてのいくつかの考察

著者	アブドッラヒーム・ギャヴァーヒー, 翻訳: 豊岡めぐみ
著者別名	Abdolrahim GAVAHI, [Japanese translation] by TOMIOKA megumi
雑誌名	国際哲学研究
号	別冊7
ページ	13-19
発行年	2016-02-19
URL	http://doi.org/10.34428/00008143

グローバル化時代における文化交流について のいくつかの考察¹

アブドッラヒーム・ギャヴァーヒー
翻訳：豊岡 めぐみ

イントロダクション

まずはじめに、東洋大学の国際哲学研究センターに、ご招待いただき、歓待を受けましたことをここに感謝申し上げます。とりわけ、私の友人である、宮本久義先生、永井晋先生、堀内俊郎氏、そして特にバフマン・ザキプールさんに感謝申し上げます。

私は今回お話をさせていただくこのラウンドが、かわるがわるテヘランと東京で開かれた前回のものと同様、実りある成果をもたらし、またわれわれ相互の文化理解や協力をさらに高めることを心から願っています。

「グローバル化時代における文化交流」というメイントピックについてお話しする前に、「文化」の意味は何らかの仕方ですでに皆様に分かだと思えますので、「グローバリズム」および「グローバリゼーション」の定義とプロセスについて明確にすることから着手しましょう。

このシンポジウムにご出席なさっているすぐれた方々をご存知のように、「グローバリズム」および/または (and/or) 「グローバリゼーション」という概念は、後でこの2つは違うものだとして述べることになるのですが、「新しい」世界の秩序や状況に向けられた「新しい」ことば（概念）といえます。それにもかかわらず、この「新しい」ということによって、これらの概念は、まだ十分に定義されたり組み立てられているわけではありません。こういうわけで、ここにいらっしゃる聴衆の方々にとって、これらの概念が良くわからないままでもいらっしゃることを避けるために、少なくともこうした概念に予備的な概念を与えなければならないと思います。

以下がグローバリゼーションという概念の定義です。

1. グローバリゼーションは、人間の社会が相互に結びついているという人間の集団的自覚であり、あらゆる種類の国際的な政治や文化のプロセス間の集中を促進し、世界と世界を相互に結びつけることです（M.R.Dehshiri, デフシーリー、『宗教とグローバリゼーション』、2014, 12 ページ）。
2. グローバリゼーションは、新しい時代および新しい世界秩序の出現を意味します。そこでは、ローカルな（ある特定の地域）の数的に少なかったり、小さな出来事というものは、グローバルな大多数の、全世界で扱われる問題へと再定義され、再生されます。

また、グローバリゼーションの時代において、ある特定の場所に限られた局所的な差異は消えつつあるし、それゆえ、全世界には統一化された型が置かれるのです（ibid.83）。
3. Talinson は次のように述べています。「グローバリゼーションは、さまざまな社会、文化、慣習、世界中の個人のあいだに複雑な相互連結をすばやく拡張していくのですが、それはそういったプロセスの中における常識です」、と（ibid.）。
4. Harvey は、グローバリゼーションは、時間と空間を短縮し、距離を短縮するという２つの要素を含んでいるのだという意見を持っています（ibid.99）。
5. 他の人たちは、持続可能な平和を確立するということを目指し全世界の統一化、統合化として、あるいはまた国家を超えた市民社会の形成のことだとグローバリゼーションを定義しています（前者 ibid.145 後者 ibid.194）。

次に、「グローバリゼーション」の自然なプロセスと、計画された「グローバリズム」というプロジェクトの間に存立する差異について、お話させていただきます。前者は人類に多大な利益をもたらす、自然で積極的なプロセスですが、一方、後者は小さな社会の財源をまず占拠するため、不自然で、前もって計画された大きな力に対するプロジェクトのようなものであり、それゆえ、好ましくないものですし、ある程度の被害をもたらすものです。このような「グローバリズム」に反対することは、それを新しい種類の帝国主義やヘゲモニーとみなすことです（ibid.70）。

2. グローバリゼーションとグローバルな文化交流

シンポジウムにご出席なさっている方々はよくご存知だと思いますが、グローバリゼーションに関するすぐれた本や雑誌は膨大な数にのぼります（例えば、google でみたところ、意味のあるカテゴリーや言及以外のものも含め、今日、9,500,000 以上ものグローバリゼーションにかかわるものが見出せます）。

それでは、私自身の予備的考察に入ることといたしましょう。そして、残りのトピックにつきましては、聴衆である皆様がよくご存知だと思いますのでお任せいたしたいと思います。

1. グローバル時代において、現在の世界のグローバル化した経済において、あなたは世界のどこにいたとしても経済取引に参加することができます。あたかも、全世界は非常に大きなグローバルな企業へと変わり、世界の 70 億の人口がそれぞれ、この大企業のメンバーとなったり、株主となったりすると仮定したら、グローバルな文化もまた、同じ傾向に従うこととなるでしょう。それゆえ、ある特定の地域や国の異文化は、もはや独立した島のように分かれているのではなく、グローバルな文化が相互に結びついたものとして作用したり、あるいはむしろとてつもなく大きな文化的団体として作用するようになります。
2. このとてつもなく大きな「公的な文化的団体」のなかで、それぞれの国、共同体、コミュニティは、それが大きかろうと小さかろうと、それぞれの文化的な遺産や文化的な活力に基づいてその役割を演じます。
3. 迅速なグローバリゼーションのプロセスを考えると、世界のあらゆる場所にあらゆる人を連れて行くことができますし、今日、日本の隅の方にはまだ日本人は住んでいますし、遠くの村にはまだイラン人は住んでいます。こういう人たちはもはやそれ自体で純粋な日本人であるとか、純粋なイラン人であるとかいえなくなっています。とはいえ、彼らはグローバルに物事を考えたり行動できる人となっているのです。今日、異なった人種や国に属しているあらゆるサイエンスやテクノロジーが、「グローバル」であったり「国際的」になったりしたのと同様、それらはあらゆる国の境界を越えていくのです。

同様の仕方で、グローバリゼーションの時代において、異なった学派

やイデオロギーですら、また、イラン人であるとか、日本人であるとか、はたまた地域や共同社会、西洋や東洋、それから個々の宗教までも、そういった境界を超えたのですが、これらは、今述べたようなグローバルな属性によって、非宗教的で、多元的で、マテリアルなものとしてみなされています。そして、そのことがあらゆる国を超えた（いわば国際的な）ものとしての資格をもつのです。

4. 人類の文化や文明のグローバリゼーションの時代において、単に個人の文化的な差異や対立だけでなく、文化的差異や特権ですら減少しているのですが、それは個人の文化的な差異や対立に代わって、文化的な共通性が生まれたり、文化的に外的影響を受けたりするようになったからです。このことは新しい現象ですし、新しく着目されるべき観点です。

5. 今日、たとえば、人口増加、貧困、環境保護、地球温暖化、経済発展、失業率、階級の違い、水不足、二酸化炭素の放出、オゾン層、世界貿易、エイズ、エボラ、麻薬、依存症、人権、無秩序、家族の絆、それから、あらゆるもののなかで最も重要だと思われる、戦争や殺戮、宗教、人種や政治的対立といった問題はすべて、グローバルな視点でもって着目すべき問題であるし、また解決されるべき問題です。

イラン人の有名な詩人のある作品をここで想起してみましょう。その詩は、UN（United Nations Building）の玄関に掲げられています。

- ・ あらゆる人間は、同じ社会に属する構成員である。なぜならわれわれは皆、同じ根源から生まれたからである。
- ・ この社会全体の構成員の一人が何か痛みを感じるとき、こういうわけ、他のすべての構成員たちも同様に（痛みを感じ）心配をする。

6. 宗教と文化のどちらも、伝統や慣習に関わるのと同様に、国家やコミュニティに関わるものですが、それらは「グローバリゼーション」やグローバル化する時代の中で、古いものが今後も継続して残っていくことや、さらなる成長や発展に対して、さまざまな固有の能力を有しています。さらに、社会政治的発展のレベルに加えて、さまざまな社会の経

グローバル化時代における文化交流についてのいくつかの考察

済発展のレベルは、グローバリゼーションに順応するための潜在的能力において、ある一定の要因です。

7. また、今日、宗教、倫理、精神性、神秘主義、伝統、現代性、良心、義務などといった概念は、ローカル/国家的レベルや宗教的レベルよりも、グローバル/世界的レベルでもっと考えられるべきであると思われます。
8. 宗教の比較研究や宗教に関する現象学の宗教家であり、またその専門家として、あるいはまた、諸外国の宗教（イスラム教ではない宗教）および宗教史の担当者として、私は仏教、イスラム教、キリスト教のような宗教が、ユダヤ教、神道、ヒンドゥー教などのほかの宗教よりも、国家を超えた、いわばグローバルな力を有しているという見解をもっています。それゆえ、グローバル化した時代において、最初のグループに属している宗教は、二番目のグループに属している宗教よりも、今後もそれが残っていくのに多くのチャンスをもっているのです。ヒンドゥー教や神道のような宗教は、国家的なレベルにおいて、持続可能性を示すのですが。
9. また、現代のイスラム教の学者として、私は以下のように思います。一方で、真の国際的宗教（これについては Dehshiri デフシーリーの『宗教とグローバリゼーション』の 1～4 章をご覧ください）としてのイスラム教のグローバルな力において、また他方で、ペルシャ語の豊かさやかつて中国から地中海やヨーロッパの一部にまでひろがっていたイスラム文化やイスラム文明において（これについては Motahhari モタハリ『イスラム教とイランの相互的貢献』； Velayati, ヴェラーヤティ『イスラム教の文化と文明におけるイラン人の役割』をご覧ください）、過去何世紀にもわたって、イランとイスラム教の結合は、文化と文明のなかで顕著な役割を果たすことができたのですが、それは現在の世界情勢のなかで十分役立たせることができる力なのです。
10. グローバリゼーションにおける文化交流における予備的考察のなかのこうした短い項目の最後となる 10 番めのコメントとして、わたしたちは、グローバルな問題を扱っている、以下に挙げるような、近年執筆された重要な本に注目すべきです。

その本とは、たとえば、Michael Foucault の「世界の終焉」、Samuel Huntington

の『文明の衝突』、Rene Guenon の『量の支配と時の徴』、Jean Guiton の『神と科学』、Konrad Lorenz の『文明化した人間の８つの大罪』、Anthony Arblaster の『自由主義の盛衰』、Lester Thurow の『資本主義の将来』、などこの他にも数多くのすばらしい本があります。

３．概要と結論

- １．はじめに、わたしは日本独自の特権について語りましたが、それは日本がイランにとって、むしろアジアの諸外国にとって、文化的モデルとして影響を及ぼすようなポジションにあるということでありますが、それはどんなモデルかといいますと、産業を促進する一方で、有益で価値のある、文化的な伝統を維持するというモデルです。

言い換えれば、わたしたちイラン人とそのほかのアジア諸国は、日本から多くのことを学ぶことができるのです。というのも、わたしたちは今日、現代的なものと伝統とをいかに融合させるのかを学んでいるのです。そしてまた、国家の倫理的価値を維持しながら物質的な進歩や幸福を得ることについて、また環境を保護しながらいかに発展を成し遂げることができるのかを学んでいるのです。

- ２．わたしたちのこうした両方にまたがるような文化的な関係（国家の倫理的価値を維持しながら物質的な進歩や幸福を得ることについて、また環境を保護しながらいかに発展を成し遂げることができるのか etc）において、新しい基礎を築こうとつとめる必要はありません。そうではなく、むしろわたしたちは、古くから受け継がれたものや遺産をよみがえらせるようにしなければいけないと思うのです。実例を挙げるとすれば、奈良にある、奈良国立博物館、あるいは、たとえば、Hashim Rajabzadeh ハーシェム・ラジャブザーデ、Kamyar Abedi カームヤール・アーベディーの多くのすばらしい文学的作品、多くの日本の旅行者や外交官のメモリー、日本におけるイランについての学問的研究、大野盛雄氏の Khairabad-Nameh 『善と悪書』、Masih Mohajeri マーシ・モハジェリーの『日本におけるイスラーム教』、そして最後に私自身の著作である『神道について』などにおいて、わたしたちはそれらの中に模範を見いだすことができるのです。

3. 最後に、私の考えでは、宗教はいまだあらゆる国家の文化的遺産の基礎といえます。それはイランにおいてはイスラム教、日本においては仏教や神道なのですが、さまざまな国において、倫理的、精神的な価値を高める際に宗教は重要な役割を果たすことができます。とはいえ、消極的で破壊的な役割をも宗教が有しており、時に誤解したり、宗教に熱狂してしまったり、狭い考え方をしてしまったり、人間社会の内側や、あるいはそうした社会と社会の間に、暴力や対立を引き起こしてしまったりという暗い側面があることは否めないのではありませんが。

こういうわけで、私は以下のことを推奨します。宗教の真の側面によって、そのような誤解をしてしまったり、不正確に捉えてしまうという不名誉を取り除くことにより、わたしたちは、皆、自国および世界の外側の持続可能な平和を維持しつつ、こうした有益なツールをうまく利用するよう手を取り合うべきなのです。

ありがとうございました。

原註

¹ 世界宗教センター所長、アブドッラヒーム・ギャヴァーヒーによって、東洋大学国際哲学研究センター（12月11－14日、至東京）における国際シンポジウム、「共生の哲学に向けて：イラン・イスラームとの対話」において発表したもの。